

平成22年 3月31日現在

研究種目：基盤研究 (c)

研究期間：2007～2009

課題番号：19530431

研究課題名 (和文) 情報行動と社会的ネットワーク形成に関する実証的研究

研究課題名 (英文) Empirical study of social network and behavior in the information society

研究代表者

犬塚 先 (INUZUKA SUSUMU)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：70009752

研究成果の概要 (和文)：情報行動の特性はネットワーク関係に特徴的に表れている。その一つであるオンライン・コミュニティを分析し、参加様式と構成が多層多次元であることを明らかにした。その関係を、連結・位置関係というコンテキストと、流れ・方向を加えた「文脈性」概念を用いて分析した。コンテキストはネットワーク環境を形成し、その定常状態の一つがコミュニティなのである。そして現象の必然性をささえる社会的合理性要因として「共振性」(選別、共感、呼応) という概念を提示した。

研究成果の概要 (英文)：The characteristics of informational behavior is shown in the area of Internet community and communication. The online community is constructed by plural levels and strata. I explained it from the viewpoint of Contextuality. It includes both position and flow. It is defined that one of the steady states of the context corresponds to any community. The sympathetic vibration among the people and their communication affects the social relations and sustains them continuously.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：情報行動、オンライン・コミュニティ、情報化文化、情報社会

1. 研究開始当初の背景

(1) 情報通信技術・コミュニケーション技術 (ICT) の発達、それに対応した情報端末機器の浸透によって、社会関係の領域で新しい現象が現れた。日常生活分野での行動、コミュニケーションのあり方が変化し、行動様式

の対応を迫られている。

(2) 特徴的に現れているコミュニケーション、行動様式の特徴を、新たな行動原理の形成と捉え、それに基づく社会関係の構築と社会秩序の原則を解明することを研究動機と

した。

2. 研究の目的

(1) 行動のつながりとして形成される社会的ネットワークとその構成原理を明らかにする。

(2) 理論仮説として、「文脈性」と「社会的合理性」を設定し、この二つの側面から、情報、コミュニケーションに関わる新しい現象、行動を分析する。そして、情報社会に伴う社会構造の変化への解明へと発展させることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 情報行動に関する文献、資料研究

オンライン・コミュニケーション、携帯電話等、新しい情報行動に関する研究、および実証データを参照し、これまでの成果を明らかにした。

(2) 実証研究

若者（高校、大学生）、市民、勤労者を対象として、情報・ネットワーク行動の実態、それに対する意識を明らかにするためのアンケート調査を行い集計、分析した。

地域情報化計画に特色を持つ事例として、高知県、岐阜県、岩手県、千葉県、仙台市、白石市についてインタビュー調査と資料収集を行った。そして、地域 SNS を積極的に展開している事例として、八戸市、館山市、掛川市、浜松市、兵庫県、松阪市、八代市においてインタビューと資料収集を行い、類型化を試みた。

(3) まとめと理論化

既存の研究蓄積、理論から導いた「文脈アプローチ」を出発点の理論仮説とし、事例、量的、質的データを総合して分析を行い、理論としての有効性、今後の発展可能性について検討を行った。

4. 研究成果

(1) 情報行動の分析枠組み

個人にとって情報への対処には二通りの仕方がある。第一のケースは、情報をもっぱら単純な反応、あるいは個人の現状との対比でサイクルを描く。情報が個人の外側に位置しているような感覚で捉えられる。第二のケースは、情報が識別、選別のレベルを経由してサイクルを描く。両者のケースともに、情報取得とそれへの対処という情報処理行動が行われ、それが繰り返されていくことは同じだとしても、個人の内部へ取り込まれる深さが異なる。前者は、認識の比較的浅いレベルで行われ、識別、受容という操作が主にかかわる。そのために情報と個人との相対関係

で見ると、外部にあるものとしての情報の性格付けが強い。それに対して、後者は個人の深い認識のレベル、判断や吟味・評価という側面から対応が行われるため、内部に蓄えられた既存の情報、つまり内側の情報が重要性を持つ。個人からみて、外部と内部とに情報が位置し、これのどの局面で情報行動が展開されるかによって、内容が変わってくる。

以上のことをもういちどまとめると、情報と個人とを対置させて考えた場合、個人の情報行動は内部と外部という二つの領域として存在する日常生活で、数多くの情報を個人・主体が判断して、この二つのどの領域で対応するかを通じて対処している。

情報は内容、つまり意味と価値があり、それを伝達することによって、効果を持つ。そして同時に、情報はその媒体としての記号、シンボルが使われるから、記号自体が与える影響も作用する。つまり、記号が発せられるとそれが刺激の一つとなり、情報内容以前に、刺激として作用を果たす。電子掲示板への送信に対して返答がなされた、たくさん反応があったというそのこと自体が、満足要因、つまり意味を持つという場合である。この場合は個人にとって情報は外部に存在するという意識が勝っている。反復するやりとりが継続するにつれ、情報を一度取り込んで判断し、その結果としての発信という行動が増加するはずであるが、情報発信速度を優先する結果、個人の内部に十分浸透する前に、反応行動として、発信が行われる。そして情報をやりとりする条件、場面において情報伝達手段が一つに限られる場合には、コミュニケーション・チャンネルが絞られるためにそれへの依存度が高く、情報の持つ刺激という側面が強調されるのである。そして、対処する原則としては、自己防御、快適性、明確性を高めること、として基準を設定できる。情報を取得する場合にも、この基準が作用する。

情報の持つ属性、二面性に対応した形で、つまり同質性と異質性、普遍性と個別性、外延と内向、相互に関係しながら情報行動が展開する。そして、個人の側からみた情報の方向性、位置関係、つまり外的、内的という要因は、外延と内向に主として関わる。情報行動はこれらの諸属性をめぐりながら、具体化させるように行われると考える。いくつかの局面で、いろいろな組み合わせが発生する。その発生頻度の大きい形態が、その時点で特徴的な情報行動となる。

そして、特に情報行動として特徴を付け加えると、情報自体が容易に移転することから、上記の二つの特性の間を相互に移行する点が特徴である。同質的側面がある場合には異質性へと転換し、その逆もある。また、個人主体の内部に即してみると、情報の受容、解読、評価の間で、情報が相互に容易に転換す

る。受容から評価の方向と、評価から受容へ影響する。順序関係は存在するけれども、その間の移行は迅速であるため、ほとんど順序を意識させずに情報が伝達される。

そして、個人と個人との間、個人と集団との間でも情報は移行する。コミュニケーション過程として描かれる関係である。

次に、情報＝パターンは、ほかのパターンと連結、組み合わせられ、共鳴する。その一つが、人々の生活パターンである。情報と複数の人間行動が結びつく場合に出現する状態を「情報化文化」と呼べば、情報化文化は一定のパターンを示す。その情報化文化のパターンに沿って情報行動を観察していくと、情報を介したつながりへの理解も深まる。情報行動は、これら2つのパターン、すなわち情報それ自体と情報文化、を調和的に結びつけるという傾向性を持っている。以上のとおり、情報を個人から見た外部と内部、そして情報それ自体の持つ意味と価値、という点を分析軸として、情報行動を位置づけることができる。

(2) 情報行動の内容

市民、および勤労者を対象とした量的調査から次の点が明らかになった。インターネットからの情報収集でもっとも基本となる点は、時間的な早さといえる。情報源の確からしさは措くとして、新鮮な情報がインターネットから得られることを期待している。そして、女性の場合には、これに加えて感覚的、情緒的基準でインターネット上の情報を受け止めている。

情報社会環境のなかでの行動の様式では、若い層と高齢層という年齢階層の両極で、人とのつながりを求めることを第一の基準として位置づけられている。その間に位置する層、特に50代では自分の信念に基づく行動を選択している。このことは、現在の社会状況における各年齢層の置かれた特徴の反映として理解することができる。社会関係への入り口、そして仕事から離れて生活する高齢者は、社会関係の量や質が相対的に少ないことの表れであろう。この点が、情報化という段階で明確に表面化した結果といえよう。情報化は新しい様式を生み出すだけでなく、これまで表面に現れなかった諸側面を表現、つまり文字通り情報として社会へ投げかけることになる。

(3) 情報化文化

現在展開されている地域 SNS の特徴を見ると、共通な部分と地域に固有の部分とが同居している。共通部分は地域社会のつながり、お互いのコミュニケーションの活発化という、会話の広がりを作ること、地域社会特有の事柄、再認識という側面である。これらは

SNS の中でどのようなグループ『コミュニティ』が展開され、活発にやりとりされているかを見ると内容がはっきりする。いずれも地域社会の身近な問題、子育て、環境などが主な内容である。

そして、これに加えて、各地域の SNS はそれぞれ特徴を持って運営されている。その特徴を地域ごとの「情報化文化」として、理解することができる。この用語は高知県情報化計画書の中に使われている。本研究では情報化を進めるにあたってのリーダー層の性格、運営のルール、そして元から存在している地域社会特有の社会関係、意識の反映をこれに含める。情報化は共通の技術、そしてデジタル技術とその標準化を基盤としているから、文化とは一見異なる性格を持つように思われる。しかし、デジタル化はその出発点となる既存の生活、関係なくしては成立しない。それらのあり方によって、デジタル技術とネットワークの形成、運営が個性を伴ってくるのである。

3 種類の実証データから、次の事柄が特徴として指摘できた。第一に、情報の受容に関して、全般的な傾向と併せて、特に女性に特徴が現れた。自分で納得できるかどうかという、内部にある尺度を受容の基準として重きを置いている比率が高い。情報の機能、活用というよりは情報への主観的関わりの強さを指摘したい。言い換えれば比較的情緒的に対応しているのである。

第二に、情報化が進んだ社会における行動様式として、年齢の特徴がある。若年層、70歳以上の高齢層では、インターネットなどを通しての関係で多くの人とのつながりを基準とすることに基盤を置くのに対し、中間の年齢層、特に50代では信念を持った自由な行動を遂行することに共感している。実際の社会生活にみられる行動を想定すると、若年、高齢者は順序関係は両極に置かれているが、ともに社会的つながりが少ない年齢層であり、その気持ちが情報社会に反映される。50代は日常生活の中では職業などにより、人間関係、社会関係は形成されるが、同時にそれからの制約要因を実感しているであろう。その状態の反映が、情報社会での自由な行動へ向けられていると推測される。

第三に、インターネット上に発生する、法律や社会的規範からの逸脱行動の増加に対して、その理由に基づいて判別した規範意識で、女性、就業している人と高校生、に特有な傾向が見いだされた。ともに法律、規範からの逸脱を倫理的な基準から判別するのではなく、それらの背景にある現実状況とその打開方向へ関係づけてとらえている。つまりこれら規範が低下したネット上の行動は、日常社会への批判、脱却として、今後の自由な新しい空間を考えるきっかけとして理解し

ているといえる。日常社会の不自由さとは、たとえば男女間の社会的な扱われかたの違い、ジェンダー的な側面が考えられる。これを克服する可能性として、情報化によって広がった領域、空間が捉えられているといえる。

(4) ネットワーク社会におけるコミュニティ
インターネット・コミュニティの場合、宿命的な要素は弱いから、メンバーはかなり流動的で自己中心的な要素を持つ。このことから、コミュニティに属するかどうかの基準は、参加者の意識が中心となる。ネットワークという性格から、コミュニケーションの過程を通してつながりが作られる。それは考え方や関心の共通性を根拠としている。関心のレベルでのコミュニティへの参加がまず最初に行われる。そしてその次に、発展の一過程として、一緒に行動する機会が設定される。言い換えると、意識のレベルでの参加、つまりネットワークへの合流が出发点である。コミュニティへの参加は、既存社会の場合には共存状態の延長としての共同行動を頻繁に行い、行動としての参加であった。それが第一順位にあって、それを基盤にしてコミュニティ・メンバーの一体感、連帯感を形成した。行動という経験が初めにあり、次にその自覚、認識、共同意識が続いた。行動の共有は、コミュニティ・メンバーがそれを可能とする条件を同じように持っているために、容易であった。たとえば居住の近さ、生活範囲の重なり、普段からの接触頻度の高さ、などである。ネットワークを介したコミュニティへの参加は、その順序関係を自由にした。初めは興味関心、意識のレベルでの参加とその表明があり、それに続いて行動もあり、さらなる意識面での関与、関わりが発生する。コミュニティへの参加のパターンがいく種類もあって、柔軟となったのである。

インターネット上のコミュニティの特性は、現在のところ日常生活のコミュニティとは別の領域として強く意識されている。しかし、オンライン・コミュニティの広がり、今後のコミュニティのあり方に影響をあたえるであろう。固定的な枠組みが最初にあるコミュニティから、順不同の形で形成されるコミュニティの可能性を秘めている。従来のコミュニティが解消することはないけれども、新たな形のコミュニティが出現して、日常生活の中で比重を高めることとなる。

コンピュータ・ネットワークは、技術面からみると機能階層ごとのつながりの構成によって支えられている。この機能層によって作られる関係、つながりがオンライン・コミュニティである。しかし、もっとも基本となるケーブルのつながりは、あまり意識されず、上位の関係の内容と関わるつながりが、コミュニティにふさわしい条件を備えている。し

かし、上位のコミュニティは、それだけでは成り立つことは不可能で、通常は意識されないけれども基盤となる関係が不可欠である。そして、コミュニケーションの制約という点と連動して、コミュニティ形成のあり方も制約される。

従来から存在する日常生活でのコミュニティを社会的コミュニティと呼べば、オンライン・コミュニティで明らかにされた特性を重ね合わせて再考することができる。家族、地域社会という典型的コミュニティは、血縁、同居、近隣関係、生活圏の共有という条件の強さに応じて、コミュニティとしての結びつきが違って現れる。いくつかのレベルの組み合わせ、あるいはそれらのその時々での活性化によって、それぞれのコミュニティとしての実態が異なるのである。

社会的コミュニティも実は、階層を持って成り立っていると考えることができる。つまり、階層関係を基準としたつながりを、コミュニティへ応用してみると次のように描くことができる。

コミュニティは内部と外部とが明確で、内部での関係の密度が高く、そこでの生活の再生産が保たれ（保証され）、結果として一体感を強く持つ。これらを念頭に置いて、三つの側面から捉えると次のようになる。

基盤：経済生活（共同、共通）、文化メディア（共有、連結）

接触様式：空間（上下位置）概念プラス広がり領域（テリトリー）、直接的接触プラス間接的接触という状況

意識：アイデンティティとコンセンサス

このように概念的に区分して理解するならば、これまでのコミュニティは多水準、多層にもかかわらず、それを明確に考慮、分析せず、包括的にとらえていたにすぎないのではないか。この点がオンライン・コミュニティの分析から明らかになった。そして、基盤から徐々に規定されるという従来の様式と併せて、上位の層が下位の内容を規定するという、情報社会特有の側面も注意する必要がある。

(5) 結論-文脈性と共振性

ネットワークは、文脈性（Contextuality）という側面と、関係、情報伝達の内容の面から記述できる。文脈性の連結、重層としてネットワークが構成され、つまりネットワークのタイプを決める。次いで、そこに介する情報伝達関係の性格はネットワークのパターンを決める。文脈性は、連結・位置関係という内容と、もう一つの性質として流れ・方向を持つ。前者は、ネットワーク環境を形成し、その定常状態の一つがコミュニティである

と再定義することができる。そして後者は、情報という側面から行動、社会関係を特性づけるといふ観点から必然的に導かれる属性である。その内容は選別、共感、呼応、として定式化できる。これを文脈性の下位タイプとして区別し、「共振性」という用語を用いて表現した。この枠組みを使って、情報を中心要素として動いている社会の様相、傾向性を分析するならば、現在起こっている状況の前提条件と必然性を明らかにすることができ、同時にそこに社会的合理性を見いだせるのである。

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

犬塚 先 (INUZUKA SUSUMU)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：70009752

(2) 研究分担者

()